

# 笑 い



村 田 修 子

「手を叩きましょ、……笑いましょ、あっはっは」などと笑い声を取り入れた子どもの歌はたくさんあります。満一歳になった孫が「幸せなら手を叩こう」という歌の「手を叩こう」の部分をいろいろにかえて歌ったところが、けらけら、と笑って大喜びの反応を示したのはやはり笑いでした。

或る芸術家が「幼児にとってよい先生の条件の一つは、きれいな色のセーターを着てにこにこすることです」といわれたのを聞いたことがあります。本当にその通りで、広い意味でいえば先生も環境の一つといえます。

けれどもその「笑い」にもいろいろあります。涙が出るほどおかしくて、純粹に笑いこぼる、という場面は大人だけの世界では余りありませんが、幼稚園ではよく

ぶつかることです。それは多分子どもの反応が、こんなだろう、と大人が考えた方程式通りではなく、彼等独特の型にはまらない創造的表現によるものでしょう。

以前のことですが実習にきた学生が三歳児を指導したとき、成りゆき上計画にないまま、ねことねずみの鬼あそびを始めたとき、ねことねずみになった子どもは、友だちの作っている輪の回りを、あたかもその遊びをしているように走っていました。それは追ったり追われたりしているのではなく、それぞれがただ走っているだけなので、ときにはねことねずみが真正面に向き合っただけを合わせてしまいます。「あらっ、」と思っていると互いにこりと笑ってくるりと反対向きになって又走り出すなど、この光景を見ているものは抱腹絶倒、涙を流しての泣き笑いです。すると今度はその回りに集まってきた

で、不思議そうに「ないてる、ないてる、どうしたの」と指をさされたりすると、なお一層、どうにもなりません。でもこういうときは、その純粋さにふれることのできるしあわせいっぱいなのです。

けれども、子どものしたことに対しての先生の反応の一つとしての笑い、勿論先生は何気なくしたことなのでしょうが、子どもには全然逆な感じを与えていることがあるのではないかしら、と私が小さかったときの忘れられない経験から思うことがあります。

それは学校に入学したばかりのとき、菜の花のたくさん咲いている畝の中を通って野原にいったことがあります。荷物を置いてそれぞれが好きなように遊んでいるとき、私は白い花が咲いているのを見つけたので、私は得意気に大きい声で「先生、ここに白い菜の花が咲いています」と報告しました。

先生は友だち数人と共に近づいてきてその花を見て「あははは……、これは白い菜の花じゃないのよ、これは大根の花よ」とすぐ訂正されました。私は花の形がとも似ていて、珍しいものを見付けた、と有頂天になっていただけに、そのショックはとても大きかったのです。

す。花の名前が違った、ということではなく、それを見んなの前でしかも先生に笑われた、ということは、とても堪えられませんでした。

だまりこくってしまった私を見て先生は、「でもよく考えたわね、えらいわ、色は違うけどよく似ているのよ」と、あわててつけ加えられたことも覚えてはいますけれど、笑われた、という事実はそのことばで打ち消されることにはなりませんでした。

今でも畝のすみに捨てられたり、残されて咲いている大根の花を見たり、最近各所に咲いている紫色のショカツソウ(?)を見ると、すぐにそのときの光景や、自分が恥かしい思いをしてしよげたその気持ちまで思い出のです。そのとき先生の笑いは、ばかにしたり、あざけったりした笑いでなかったことは勿論なのですが、いつまでも忘れられないのです。ここが問題です。

毎日子どもに接していて、いろいろなこと柄について反応している自分、前もって予想されないことの処置が、とっさのことであつたり、忙しかったりするため、だいこんの花のようになっては大変なことだ、と思つていきます。(お茶の水女子大学附属幼稚園)